

支援委員会への招請

11.19斗争公判支援委員会(筆)

現在、大学で配布されている多くの識戒線のピラにあるように、大学当局の言うところの大学とは「理念の庵」「学問研究の場」であるというのは、完全にうそであり、欺瞞でしかなく、それを我々学生が大学当局に期待するならば全くの幻想でしかない。このことを証明するものとして、昨年11月19日の出来事が我々に絶好の材料として大学当局は提出している。つまり明大中野高校において、教職員に対する学費説明会に介入し、10月11月の大学との団交をふまえ、小牧(学長兼総長)理事者等と、直接実力団交を貫徹しようとした我々明治大学学生を、建造物侵入、威力業務妨害という罪名でいとも簡単に、まさに学外者であり、又、国家権力の手先である村動隊を導入し、38名もの学友を予口、リンチを加えたうえで逮捕したという事実は何を語るであろうか。またそれをニヤニヤ笑いながら傍観していた教職員、自ら率先して走げる学生をとり押えた教職員を何と説明すればいいのだろうか。まさに明確である。これは、何もこの日だけに限られたことではない。昭和41年以降の学費斗争、第1次学費斗争、69年明大斗争の厂史の中でも度々あったことだし、その前後をつうじて、明大だけではなく、全国の大学管理者がとってきた一貫した姿勢である。

日本の教育体制が中教壇路線をもって、学生自治、サークル、寮の解体をおし進め、資本にみあった教育体制へと再編されつつあり、明大のその展開として、II部つぶし、寮つぶし、またロックアウト体制にみられる学内管理支配体制の強化、総じて差別、選別教育の徹底化がある。そしてそのための財源確保としての学費値上なのであり、ゆえにこの方針を貫徹するためならば学生を国家権力の手へ売り渡すことなど平気であり、今後もその攻撃は強まりこそすれ、弱まることはない。このような大学当局の攻撃に対しての反撃として、昨年11.2の対学生部団交から始まる寮生の闘いがあり、11.19の実力団交獲得斗争があった。その闘いは受けつかれ、現在寮斗争の点検と全寮規模での斗争を組むための「事務局」が設置され、強まる当局のしめつけに闘いが組織されています。

我々はこの出発点としての11.19斗争を支援しつつ、また今後の闘いの主体として、II部つぶし、寮つぶし物碎へ天起したいと考えます。

多くの寮生、学生、教職員に支援委への結集を呼びかけるとともに闘いへの決起を強く訴えます。

会の主旨、11.19学費斗争を、寮斗争委として斗った諸君を支援しつつ、II部改廃物碎等寮斗争との結合をばかっている。
連絡、中山寮。会員、機関紙1ヶ月100円。各公判の報告、寮斗争の現状、寮の主張等の内容を発行し、会費は法廷維持と機関紙発行にあてる。

1973.5.11.